



支援センターからボランティア派遣

能登半島地震支援センター（金沢市・金沢別院内）は2月1日からボランティアの募集を開始、5日からは被災寺院などの要望に応じたボランティア活動を始めた。15日の作業に同行した。震災から2カ月近くとなるが、その現状は依然として厳しく、ボランティアに参加した僧侶らは「被災地、被災者に心を寄せた支援がまだまだ必要」と声をそろえている。

2月14日から16日までの3日間は、津波で本堂、庫裏が甚大な被害を受けた能登町白丸地区の高源寺で、延べ21人が活動した。建物内に流入した砂の除去、海水に浸かった畳や家具の運び出しなどの作業を行った。現地での宿泊場所の確保が困難なため、支援センターからの車移動となる。交通事情が悪く同寺までは片道3時間以上を要し、作業時間は1日4、5時間と限られる。

15日には支援センターから車3台に8人が分乗して

高源寺に到着。午前10時から作業を開始した。東京から帰省した同寺衆徒の鳴海昭純さん（66）の確認を取りながら、本堂や庫裏の海水に浸かった畳や家具などを境内に運び出し（写真）、種類別に仕分け。めくれ上がった床板などはできる限り元の位置に敷き戻して、衣体なども水に浸かったものと、そうでないものとに分別していった。

支援隊員としてボランティア活動に参加した僧侶は「あまりの惨状に最初は絶句したが、内陣が少しき

被災寺院の要望に応じた活動を展開

いになることで作業が続けられた」という。

東京都三鷹市の関本貴さん（67）は「行政のボランティアは満杯で申し込みできなかった。その際に、支援センターのことを教えてもらった。門徒でない私でもいいのかと思いつき申し込むと、快く受け入れてもらえ、ありがたかった。お寺のことをよく知る僧侶の方たちが一緒だったので安心して活動できた」。

築地本願寺職員の福田みくさん（24）は「被災地のこととはこれまで新聞やテレビのニュースでしか知らなかったが、実際に災害現場を目の当たりにし、いかに大変な状況にあるかがわかった。一人一人の力は微力でも、みんなが力を合わせて活動に取り組むことで、少しでも被災地の方々に寄り添うことができればと思う」と話す。

コーディネーターとして現場で作業を指示した工藤哲修さんと篠原法樹さんは「作業時間が限られるので、一人でも多くの人に参加してもらえるとありがたい。さらに、参加したボランティアの人たちが地元に戻って周囲の人たちに活動のことを伝えることも大切だと思う。被災地の方々が最も恐れるのは、自分たちのことが忘れられていくこと。被災地の人たちに心を寄せて、活動を継続していききたい」と話している。

ボランティアの問い合わせは支援センター ☎090(2166)5325または090(2166)5325。

